

〈中央銀行パネル〉

## 中央銀行政策と市場とのコミュニケーション

神戸大学 地主敏樹

中央銀行の実施する金融政策の有効性は、市場参加者の期待にどれだけ働きかけることができるかに依存している。秘密主義と訣別した「静かな革命」(Blinder)以降、中央銀行は、金融市場とのコミュニケーションに様々な工夫をこらしてきた。インフレ目標も、そのコミュニケーションの方法に大きな特徴がある。バブル崩壊後の景気後退・停滞期には、低金利の継続に関して、日本銀行のコミットメントを嚆矢として、カナダ銀行や米国連邦準備が継続期間を明示してみせたし、リクスバンクなどは政策金利の予想経路を提示してみせた。イングランド銀行は、量的緩和を導入することで、インフレ目標の実現が可能となることを、ファンチャートで訴えた。連邦準備も、長期予測を導入して低インフレ率の予測が強まることを回避しようとした。連邦準備と日本銀行は、長らく躊躇ってきたインフレ目標の導入にも踏み切った。また、より広い文脈で、金融システムの安定化にも関与して、流動性や長期資金の供給にコミットしたり、ストレステストを実施してその結果を発表してきた。さらに広い文脈では、中央銀行と行政府との関係という大きな枠組みに対する市場の評価も関係してくる。

本パネルでは、諸中央銀行の様々な工夫を紹介しながら、その効果についての評価を試みたい。